

令和7年度 学校評価【計画書・報告書】

加賀市立山代小学校 校長 平塚 智康 印

学校教育ビジョン

- ◆学校教育目標 「わたしも みんなも 幸せになる学校をつくる人になろう」
 〈目指す児童像〉・自分も人も大切にできる子・自ら学ぶ子・くじけずやりぬく子
 〈目指す教師像〉・子どもたちに寄り添う教師・令和の日本型学校教育構築に向け挑戦する教師・様々な人々と協働できる教師
- 確かな学力（知）：○「個別最適な学び」「主体的な学び」の推進 ○「協働的な学び」「対話的な学び」の推進 ○子どもに委ねる学びの推進、自立した学び手の育成 ○探究的学びの創造
- 豊かな心（徳）：○I（愛）メッセージ ○自己肯定感・自己有用感・自己効力感の育成 ○生徒指導の4つの視点すべての教育活動に
- 健やかな体と心（体）：○よく遊び、よく学び、ぐっすり眠れる子 ○自分の健康（体・心）を自分で守れる子 ○レジリエンス、ストレスマネジメント力を育む
- 【家庭・地域・関係機関等との連携】
 ・地域とともにある学校づくり・積極的な情報発信・地域の「人・もの・こと」を生かした学習、ふるさと山代への誇り・愛情を醸成する学習
 ・保小中の縦の連携や交流、円滑な接続・教育委員会、教育総合支援センター、福祉部局等、関係外部機関との情報共有や連携

評価の項目	今年度の重点目標	具体的な取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果（中間）	判定結果（最終）	今後の改善策
①教育課程・学習指導	個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実を図った授業作りを中心に行なう。児童の主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善を図る。	魅力あるゴール設定をもとに授業をデザインし、教科のねらいの達成と児童が自分の学びを調整しながら学ぶよさを実感できる授業づくりを工夫する。	教務主任 研究主任	昨年度の反省を生かし、魅力あるゴール設定と導入の工夫を中心に重点をおき、実践を積み上げる1年間にしたい。研修を通して、単元構想の仕方や委ねる場の設定、教師の手立てや準備物を検討する必要がある。	【成果指標】 魅力あるゴール設定をし、個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実を図った授業を行った教職員が	魅力あるゴール設定をし、個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実を図った授業を行っている。	教職員アンケート7月・12月 C・Dの場合、授業作りについて再度共通理解を図る。	A		肯定的な回答が92.8%であった。教材研究、教材準備の時間を確保し、学年で魅力あるゴール設定を行なうことができた。長期休み等に教材研究をし、2学期以降も児童が学びに向かいたくなる魅力あるゴール設定を行っていく。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	きまりを守り、落ち着いて学習に取り組める子どもを育てる。	生活及び学習のきまり（山代ルール）の定着に向け、子どもたちの意識を高める。また、教職員は生徒指導の4つの視点を意識し、全校児童に一貫した指導を行う。	生徒指導主任	授業規律や集団ルールを守ろうとする児童がほとんどだが、規範意識の低い児童もいる。また、教職員も、生徒指導の4つの視点に、特に、安心・安全な学校づくりへの意識を高くもつ必要がある。	【成果指標】 児童は、生活及び学習のきまり（山代ルール）を守っている。	山代ルールを守っている児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童アンケート 7月・12月 C・Dの場合は、指導方法を再検討する。	A		児童アンケートの結果、「そう思う」44.7%、「どちらかといえばそう思う」40.2%だった。「そう思う」の割合がさらに増えるように、山代ルールの徹底を職員一同で指導していく。
③キャリア教育・進路指導	自己の役割を理解し、見通しを持って主体的に活動する子どもを育てる。	児童が自分の仕事に責任を持って取り組み、係・委員会・縦割り活動等の企画や運営に自ら参加し、行動できるように指導する。	キャリア教育担当 児童会担当	自己の役割を理解し、与えられた仕事に取り組む児童は多いが、見通しを持って自主的に行動できる児童は少ない。	【成果指標】 見通しを持って、自主的に自分の仕事や活動に取り組んでいる。	係や委員会活動に自主的に取り組むことができた児童が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	児童アンケート 7月・12月 C・Dの場合は、指導方法を再検討する。	A		児童アンケートの結果肯定的な回答の割合が92.5%だった。さらに委員会や係活動において主体性を高めていくように工夫して指導していく。
④健康管理	児童の体力の向上や運動習慣の確保を目指す。	体育の導入時に「スポーティーなしきわ」に取り組み、体力の向上を図っていく。	保育部（保健室）	昨年度の体力テストの結果より、日頃からの運動習慣が著しく低下しており、体育の時間を活用して運動量を確保することが課題にあげられる。	【成果指標】 スポーティーなしきわで全学級チャレンジ部門においてブロンズを超える。	スポーティーなしきわ 入力フォーム A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	スポーティーなしきわ 入力フォーム C・Dの場合は取り組み方法を再検討する。	D		現在のブロンズ達成率は12.5%。年間を通して達成できるよう、声かけを行っていく。
⑤安全管理	教職員の災害時の指導力・実践力を高め、児童の災害に応じた身の守り方や避難方法についての理解を深め実践力を高める。	教職員の災害時における指導力・実践力を高め、児童の災害時の身の守り方や避難方法についての理解を深め実践力を高めるために避難訓練の事前・事後指導を工夫する。	教頭	児童は災害についての大まかな理解はできているが、災害に応じた命の守り方や避難方法等について具体的に理解し、適切に判断・行動する力が必要である。	【成果指標】 避難訓練の事前指導・実践・事後指導を通して災害への理解を深め災害時の対応力が身についたと答える教職員・児童の割合が	避難訓練の事前指導・実践・事後指導を通して災害への理解を深め災害時の対応力が身についたと答える教職員・児童の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員・児童アンケート 7月・12月 C・Dの場合は、速やかに改善する。	A		教職員の肯定的回答は100%、児童の肯定的回答は避難訓練91.2%・シェイクアウト訓練98.2%だった。2学期以降も災害時に自分の命を守る行動がとれるよう定期的に安全指導を行う。
⑥特別支援教育	こまめな情報交換やニーズの把握に努め、個に応じた支援の工夫と研修の充実を図る。	困り感のある児童に対し、校内支援委員会・専門相談に基づいて継続した支援を行う。児童の実態や教職員のニーズに合わせて、研修内容や教育支援員の配置を工夫する。	特別支援教育コーディネーター	校内支援委員会で支援の方法を話し合っているが、支援を必要とする児童の数が多く、より効果的な支援体制や方法を検討する必要がある。	【成果指標】 児童の実態を把握し、校内支援委員会・専門相談などを活用して、個に応じた支援ができるよう努める。	校内の特別支援体制とその効果に満足している教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート 7月・12月 C・Dの場合は、体制や指導のあり方を再検討する。	A		教職員アンケートの結果「そう思う」21.4%、「どちらかといえばそう思う」75%だった。困り感のある児童については、支援会議等組織的に対応していく。
⑦組織運営・業務改善	協働と業務改善の意識をもち、業務の効率化、機能化、平準化を進める。	各部会や担当者、学年間において分担できること、削減や効率化できることを考え、業務改善を行っていく必要がある。	教頭	担当業務によって時間外勤務時間の偏りが見られる。各部会、担当者、学年間で、協働的に業務を進めるとともに、業務や行事の精選、効率化を意識して業務改善を行っていく必要がある。	【成果指標】 組織的・協働的に業務に取り組み、業務改善に努めたとする教職員が	組織的・協働的に業務に取り組み、業務改善に努めたとする教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート 7月・12月 B・C・Dの場合、組織体制や運営方法について再検討する。	B		肯定的回答は87%だった。1学期は欠員2名の業務を分担した分、一人にかかる負担が増加した。業務を見直しリスト化を図り員数を増やし負担を減らす。
⑧研修	校内研修の充実を図り、教職員の授業力向上を図る。	授業作りや学級の土台作り、効果的なICT活用などの校内研修・OJTを行い、教職員の授業力向上に向けて内容を工夫する。	研修部	今年度の研究の柱である個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をめざし、研修を行なっていく。年間を通して授業作り研修や授業の土台作り研修を設けるとともに、その他必要な研修・OJTを設定していく。	【成果指標】 授業力向上を目指して、積極的に研修に参加している。	校内研修・OJTが授業改善に生かされたと感じた教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート 7月・12月 C・Dの場合、研修内容や研修頻度について再検討する。	A		「そう思う」39.3%「どちらかといえばそう思う」60.7%であり、肯定的な回答が100%だった。研修サポートも活用し、全員で学びの機会を設けることができた。今後も引き続き、研修体制を整え、日々の授業に還元できるようにしていく。
⑨保護者、地域との連携	保護者やPTA、地域の方々との連携を図り、積極的に地域資源を生かした学習活動を行う。	PTAやCS、山代地区会館、子ども会等、地域の方との連携をさらに深め、地域の人材・環境等を生かした授業づくりを推進し、地域資源シートを作成し効果的に活用できるようにしていく。	教頭 各担任	昨年度より、CSを有効活用した学習活動に少しずつ取り組んできたが、さらに、地域の人材・環境等を生かした学習活動を実践した。	【成果指標】 地域資源シートを作成・活用できたと答える教職員が	地域の人材や教材を授業や行事で活用できたと答える教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート 7月・12月 C・Dの場合は、指導や取組内容を見直す。	A		肯定的回答が95.7%だった。特にCSの方が様々な授業のサポートをしてくださった。今後も地域の資源を活用した授業を推進していく。
⑩教育環境整備	情報モラルを守り、chromebookを学校や家庭でも効果的に活用できる素地をはぐくむ。	情報教育年間指導計画にそって、情報モラルについて考えたり、家庭で児童と保護者が情報モラルについて一緒に考える時間を設ける。	情報担当	学年が上がるにつれ、ICTをツールの一つとして、必要な時に自分から選んで進んで使えるようになってきた。一方で、chromebookを学習に関係のないことに使ったり、ルールを守れなかったりする児童がいる。今後、家庭へのchromebookの持ち帰りも見据え、児童に情報モラルを身につけさせていく。	【成果指標】 保護者の方が家庭で児童の情報端末の活用について管理できていると答える保護者が	家庭で児童の情報端末の活用について保護者が管理できていると答える保護者が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	情報モラルについて考えるフォーム6月・11月 C・Dの場合は、学校での情報モラルを徹底する。	A		肯定的回答は84.3%で、「そう思う」の回答は28%だった。まだルール等を決めて活用できていない家庭があるので、学校と保護者が連携して子どもの実態把握に努め、家庭でルールを決めて情報端末を活用できるようにしていく。

学校関係者評価	
---------	--